

2014年 1～2月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子
 双六の折り目に賽の目の傾ぐ
 めでたさといふ忙しさも松の内
 金柑のほの苦甘く春隣
 早春のいまだ力をぬかぬ風
 下荫に弾む足裏こそばゆき
- 横浜 稲田 涼子
 凧ぐ瀬戸に瑞気満たして初茜
 草の戸の賀客は律儀なる雀
 初雀電気仕掛のごと弾む
 檜皮屋根に神話想はせ初鳥
 目出度さの浸れば溢る初湯かな
- 藤沢 藤田 富子
 異国めくみ仏伏目冬うらら
 すがれ鳴く虫のどこかに冬の宿
 あれこれと買物急ぐ冬の街
 稜線に沈む夕陽や冬野ゆく
 巫女の緋の袴を濡らす冬の雨
- さいたま 宮崎 美智子
 ふいに来て木立騒がす冬の鳥
 法話聴くうなづきをれば冬ぬくし
 大男いとも小さき熊手もつ
 冬の霧灯りともりおり無人駅
 枯を踏む万葉の歌思ひつつ
- 町田 小森 まさひこ
 能登の空鉛色して冬の雁
 丹頂の伸ばし切る首空の青
 寒鯉の瀬の主として動かざる
 波滑る舟かはしゆく牡蠣筏
 侘助の咲き初む時は知られざる

2014年 3～4月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子
 編みかけの白詰草の忘れ物
 敷きつめて花屑といふ愛しき色
 降りそそぐ春の光の中にをり
 残されて風の古巢となりみたる
 一日の予定狂はせたる朝寝
- 横浜 稲田 涼子
 老松の風情深むる雪の賀賀
 地の神の覗き窓めく雪のひま
 農予定狂はせ又も互返る
 時が解く纏れもありぬ凍解くる
 野も山も動き出しそな東風の牧
- 藤沢 藤田 富子
 着ぶくれてなほにぶくなる動きかな
 採血に浮かぬ血管春寒し
 四温晴右手に富士見て橋渡る
 大北風に倒されさうなビルの角
 煮凝りに母の思い出又一つ
- さいたま 宮崎 美智子
 万の絵馬湯島の社梅さかり
 鏡花の碑「婦至図」しのぶ夜の梅
 雪はげしホームに待ちて「たか子」の句
 受験生学園都市の熱気かな
 蛇行せる利根の流れや春霞
- 町田 小森 まさひこ
 初孫に木目込み雛を送りけり
 木の芽吹く蝦夷の真青に色加へ
 み吉野の玻璃の返せし春の色
 大斜面に弧をかけ春のスキーヤー
 濁り水の怒涛蛇行の雪解川

2014年 5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
初鰓潮のうねりを跳ねあげて
大いなる蕊を匂はせ朴ひらく
笹の香をくるくるひろげ粽解く
雨粒の跳んで弾けて青蛙
一山の湿りを宿す額の花

藤沢 藤田 富子
やはらかき春の日差しの待たる日々
桜咲き心のはやる旅心
空澄みて光りと風の春の午后
露座仏の背のなだらかに山笑う
合格の御禮の絵馬や宮の春

さいたま 宮崎 美智子
ひとひらの桜の薄紅いとほしむ
行き帰り惜しみになく浴ぶ花吹雪
吹き溜る桜をそっと手に取りぬ
桜散り笹をなせる門の内
庭手入れ不意に蜜蜂目の前に

町田 小森 まさひこ
瀬戸内の小島覆ひし椎若葉
まなじりが粋を醸せし神田祭
矢車の乾きし音の続く日々
著莪原の日の斑に色の生まれけり
落人の里の日差しに草を刈る

2014年 7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
外来種調査あさぎの花を分け
朝曇とろりと淀む池の色
暑に負けてをり空元気さえ失せて
片陰といふ肩幅に足らぬもの
回復の兆し涼しき日を重ね

藤沢 藤田 富子
翡翠にカメラを据へて瞬時待つ
池めぐる蓮の浮葉を眺めつつ
短夜のさらなる浅き眠りかな
花菖蒲粹に雅に名を並べ
囁に二度寝の夢を破られし

さいたま 宮崎 美智子
スモークツリー眠気を誘う梅雨かな
真夜に咲く白サボテンを惜しみをり
虫送り家族総出の慣ひなる
屈原の粽の由来読み始む
独歩の忌我も武蔵野愛しめり

町田 小森 まさひこ
蒲の穂や古墳に迫る住宅地
海からの富士にかかり浜万年青
鷺草や女人の句碑のすっと佇つ
馬鈴薯の花の果てなる山の高
虎尾草の風もまぶしく霧ヶ峰

武者小路実篤
蛍かと思ったら星だった雲のさけめ

2014年 9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
手放すと決めたる庭の草の花
偉さうでどこか親しきいぼむしり
望月の宮へー燈奉る
草の花活けて自祝の誕生日
野の風を髭にとらえてゐるばった

藤沢 藤田 富子
天の川仰ぎ主(あるじ)はいづこかと
門火焚くこともなくなり四十年
冷そうめん無き食欲をうながさる
打ち上げし芥残して浜晩夏
夕立に走り根しとどしぶき上ぐ

さいたま 宮崎 美智子
東おどり名妓の酌を笑みつ受く
羅のカラーの柄をすらし着て
巢籠りの鳩を気遣う梅雨なかば
茗荷食みうかと忘るる降車駅
熱中症まさかまさかと水をのむ

町田 小森 まさひこ
意味深や白色にして男郎花
秋の灯や宿直室に音のなし
一本に始まる銀杏初黄葉
新米をとぐ水の量は慎重に
声の無く止まる一団稻雀

ランキングブックというところが集計した「秋」を
イメージする曲のランキングです。皆さんはど
のくらい御存じですか？

- 1位 秋桜(山口百恵)
- 2位 秋のIndication(南野陽子)
- 3位 思秋期(岩崎宏美)
- 4位 楓(スピッツ)
- 5位 落葉のクレッシェンド(河合その子)

2014年 11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
明るさといふ悲しさも黄落期
鴨百羽うねりに陣を組み替へる
メルヘンの光の中に年惜む
歩も息も止めて笹子の影を追ふ
赤海鼠身を硬うして買はれゆく

横浜 稲田 涼子
控え目な色香好もし帰り花
対馬灘程よく荒れて鯉起し
雪吊の縄の軋みに繋る景
隆々の枯木根に知る輪廻かな
寒鴉声なき群れて夕づく野

藤沢 藤田 富子
秋天につき抜けさうな大樹かな
秋の夜一筆おくる旅宿に
御手洗に心清めて秋気澄む
道祖神双体風化秋遍路
猫じゃらし太りて風に重く揺れ

さいたま 宮崎 美智子
ノーベル賞乙女の倫理野菊晴れ
聞き慣れぬ虫に耳貸す月の下
唄ひ終へほっと息抜く秋祭
和の心願きおれば天高し
緋の法衣マイクに法話菊の秋

町田 小森 まさひこ
すだく音の衰えていく日々秋深む
葉に隠れなほも下向くお茶の花
石露の花寂れし庭に生つなぐ
芭蕉忌や振り向く道のかすかなる
句会へと乗り継ぐ電車冬の朝